



日本の経済、産業を支える力

文部科学副大臣
名譽顧問 藤井基之



ユネスコに登録された日本の世界遺産は、二〇一四年富士山、二〇一五年富岡製糸場が耳新しいところですが、これらをはじめ、知床の自然、白神山地、平泉の文化遺産、日光の社寺、小笠原諸島、白川郷・五箇山の合掌造り集落、古都京都の文化財、古都奈良の文化財、法隆寺地域の仏教建造物、紀伊山地の霊場と熊野の参詣道、姫路城、原爆ドーム、厳島神社、石見銀山遺跡、屋久島、琉球王国のグスク関連遺産群の十八の世界遺産があります。

今年の五月、ユネスコの諮問機関であるイコモス（国際記念物遺跡会議）が、「明治日本の産業革命遺産」の世界遺産への登録について「登録がふさわしい」と勧告しました。対象となっているのは、萩反射炉、松下村塾、葦山反射炉、釜石の高炉跡、三重津の海軍所跡、三菱長崎造船所第三船渠、旧グラバー住宅、三池炭鉱、官営八幡製鐵所等二十三施設です。日本は、一六三三年（寛永十年）、江戸幕府が海外渡航禁止令（いわゆる鎖国令）

を出してから、一八五四年（嘉永七年）日米和親条約締結に至るまで、二百二十年もの間、オランダ、中国を除いて海外交易の門戸を閉ざしていました。しかし開国により、西洋文明国の進んだ産業や科学技術などに関する情報が一気に日本に入ってきました。明治の先人たちはそれらを積極的に取り入れ、欧米諸国が何世紀もかけて作ってきた近代的な経済、産業構造を、わずか四十年程の間に、それらの国と肩を並べるまでに発展させました。今回挙げられている遺産を見ると、明治人の日本の近代化への情熱と行動力、先見性など、本当に目を見張るものがあります。

このような、日本の急速な近代化を可能としたエネルギーは一体何だったのでしょうか。

先日、ある雑誌を開いていましたら、以下のような、幕末から明治期の日本の造船技術を支えた、歴史の表面には全く現れたことのない無名の上田寅吉という人物の逸話が紹介されていました（月刊 Wedge

五月号）「なりわいの先駆けたち」。

上田寅吉は一八二三年（文政六年）に伊豆の小さな漁港戸田に生まれ、成長して和船の船大工になりました。ペリーが黒船で日本に来航した年の翌年一八五四年（嘉永七年）、黒船来航を機に、江戸湾の石川島で初めて旭日丸という洋式帆船の建造が始まり、寅吉は船大工としてここに雇われたそうです。

和船と西洋帆船の造船技術の違いは、和船は船底となる一枚板を敷き、箱を作るように板を張り合わせて作り上げていくのに対し、洋式船では、まず船の基本となる「竜骨」と呼ばれる背骨を作り、それに部材を肋骨のように直角に取り付け、全体の骨組を作る、それに外壁を張っていくという方法です。寅吉はその洋式造船技術を石川島で学びました。

一八五五年（安政二年）十一月、安政大地震が起こり、日露和親条約の締結にきていたロシアの軍艦ディアナ号が沈没、このためロシア人五百人が帰国できなく

なっていました。そこで幕府が協力して洋式帆船を、寅吉の故郷である戸田で作ることとなり、寅吉たち七人の船大工棟梁がロシア人の技術者と協力して造船に当たりました。言葉は通じませんでしたが、日本人船大工の仕事は緻密で、着工からわずか三か月で完成させました。その後一年以内に、戸田では同型の船が六隻建造されたそうです。

一八五七年（安政四年）、幕府により、長崎溶鉄所が建設され、ここにオランダ人造船技師を招き、造船所を建設することになりました。寅吉は、三十二歳でその職人に抜擢されました。世界遺産候補の三菱長崎造船所の前身です。

一八六二年（文久二年）、蒸気船の造船操船技術などを学ぶため、幕府は榎本武揚

など長崎海軍伝習所の士官五人、他に医者、法学者なども含め九人の武士をオランダに派遣しましたが、これに職方と呼ばれる職人が同行することになり、寅吉も加えられました。

一八六七年（慶応三年）、彼らは留学を終え、オランダで新造された幕府の軍艦開陽丸で帰国しましたが、翌年、戊辰戦争勃発、幕府は倒壊してしまいました。寅吉は榎本武揚とともに開陽丸で蝦夷に逃れ、五稜郭にこもって官軍と戦いましたが敗北。囚われの身となりましたが、一八七〇年（明治三年）、釈放され、維新政府から命じられて横須賀の造船所の職長として出仕。この造船所は当時、幕府が作った日本最初の大規模工場で、寅吉は、留学で学んだ蒸気動力の新造船の建造に力を発揮しま

した。一八八六年（明治十九年）、寅吉は六十三才で工場長になりましたが、それは退職の直前でした。この社会的地位も持たない一介の船大工上田寅吉は、「わが造船史上の一大恩人である」と評されたそうです。一九五六年には我が国は英国を抜いて世界一の造船国となりましたが、その礎を築いたのは、こうした無名の船大工だったのです。今日、日本は世界第三位の経済大国となつていますが、それは、大きな企業の活躍もさることながら、実は、地域の中小町工場などの技術力、職人が日本の産業を支えているからこそ、と言われています。日本の社会経済は、社会的名声や権力とも無縁の、黙々と働く多くの寅吉のような優れた人材によって支えられていることを、特に政治家は忘れてはなりません。

藤井 基之

- 生年月日 昭和22年3月16日
- 選挙区 参議院比例区
- 当選回数 2回
- 出生地 岡山県岡山市
- 趣味 音楽・読書
- 個人ホームページ <http://www.mfujii.gr.jp/>

- その他 薬学博士・薬剤師
- 私の政治信条

私の政策の柱はA(エイジフリー)B(バリアフリー)D(ドラッグフリー：薬物乱用のない社会)社会創りです。

高齢者も、障害を持つ方も、国民誰もが安心して暮らし、元気で生活を送ることのできる長寿社会を創るために何が必要か、を政治活動の根底においています。

好きな言葉「昨日の夢は、今日の希望、そして明日の現実」

●活動報告

参院議員厚生労働委員会理事として、食品安全確保のための食品衛生法改正、健康増進法改正、薬事法改正、薬剤師法改正、クリーニング業法改正、国民年金法改正等に関与。

●経歴

- 昭和37年 岡山大学教育学部付属中学校卒業
- 昭和40年 岡山県立岡山操山高等学校卒業
- 昭和44年 東京大学薬学部薬学科卒業
- 昭和44年 厚生省入省
- 平成9年 厚生省退官
- 平成9年 財団法人ヒューマンサイエンス振興財団専務理事
- 平成12年 日本薬剤師連盟 副会長
社団法人日本薬剤師会 常務理事
- 平成13年 参議院議員（1期目）
- 平成16年 厚生労働大臣政務官
(平成16年9月～平成17年11月)
- 平成19年 日本薬剤師連盟 顧問
- 平成22年 参議院議員（2期目）
- 平成23年 参議院政府開発援助等に関する特別委員会 委員長
- 平成24年 自由民主党広報本部 副本部長
広報本部新聞 出版局長
- 平成25年 自由民主党党紀委員会 委員
裁判官弾劾裁判所 裁判員
- 平成26年 原子力問題特別委員会 委員長
- 現在 文部科学副大臣